

◆左京十一條三坊の調査—第81-7・8次

1 ギヲ山東麓の調査 (第81-7次)

はじめに

この調査は住宅新築に伴う事前調査として、明日香村雷のギヲ山東麓で実施した。調査区は東西12.5m、南北4mに設定し、のち一部拡張した。調査面積は68㎡。

ギヲ山周辺では、これまでに北・東辺で小規模な調査を実施している。顕著な遺構は検出していないが、大官大寺式の軒瓦が出土したり、表採されており、近くに瓦窯もしくは寺院（雷廃寺）の存在が推測されてきた。

今回の調査地は畑地で西は約1m程高い畑地（幅8～15m）を隔ててギヲ山の麓になり、東は村道小山雷線をはさみ、一段低い水田になる。後述のように今回検出の建物柱穴は調査区の西に延びており、西の畑地の少なくとも東半部は後世に盛土されたと推定できる。また、調査地の畑地は現在は1枚だが、かつては3枚以上に分かれていたことが旧水路（SD3734～3736・3738）の存在や床土のレベルからわかる。西3分の2が高く、東南・東北部は、これより0.2～0.3m低い。

層序

耕土・床土（厚さ0.2～0.4m）の直下は、西南隅が花崗岩風化土の地山、以東は西が灰白色粘土混り赤褐色粘質土、東が灰白・赤褐色粘土混り暗黄灰褐色土の整地土1となる。整地土1上面のレベルは、西端で92.3m、東端で92.1m。厚さは、東に次第に厚く、東端で約0.4mある。整地土1の下は、調査区北辺を幅0.6m掘り下げて確認した。西半が黄褐色粘質土、東半が赤褐色粘土混り茶褐色粘質土（整地土2）。上面のレベルは西端で92.3m、東端で91.7mであり、東にゆるやかに傾斜する。調査区の北西隅で深く掘り下げたところによると、整地土2は厚いところで約0.4mあり、この下には厚さ約0.4mの灰白・赤褐色粘土混り黄褐色粘質土の整地土3があり、赤褐色粘土の地山に至る。地山は約20度の傾斜で東北方向

に落ちており、整地土2・3も東下りになっている。

整地土1は飛鳥Iの土器を含む。後述のように整地土2の上面から掘り込まれた炭混り土坑SX3752からも飛鳥Iの土器が出土しており、整地土1の造成は7世紀前半かやや遅れる時期と推定できる。整地土2・3からは遺物が出土していない。SX3752出土土器からは、7世紀前半以前となるが、調査地南方の雷丘東方遺跡や雷丘北方遺跡の調査成果からすると、7世紀前半のなかに納まる可能性が高い。整地土3は上面で遺構を検出しておらず、整地土2と同時期の整地土と考えるべきかもしれない。

遺構

遺構は、整地土1の上面と、整地土2の上面で検出した。それぞれを上層遺構と下層遺構と呼ぶ。下層遺構の年代は7世紀前半頃、上層遺構の年代は7世紀前半以降で、一部は調査区内の細溝などで、出土した土器から9世紀に入る可能性がある。

下層遺構 掘立柱穴3個と斜行溝SD3750・3751、炭混り土坑SX3752がある。いずれも上層の整地土を部分的に掘り下げて検出したため、不明瞭な点が多い。

掘立柱穴3個は調査区東辺で検出。北の2個は重なり、2時期にわたるが、建物か塀かは不明。北の2個の柱穴の北にも落ち込みがあるが、浅い土坑のようである。

斜行溝SD3750・3751は、調査区の西辺で検出した素掘溝。SD3750の幅は約1.0m、深さは約0.6m。柱穴の断ち割りによって、調査区南端にも延びていることを確認。底のレベルは南が15cm程高く、北に流れていたと推定できる。北に真直ぐに延長すると、ギヲ山の北東麓をかすめることになる。SD3751の幅は約0.6m。溝肩は西が東より約0.2m高い。西肩からの深さは約0.4m。両溝は北で西に20度～30度の振れをもってほぼ平行する。間隔が約0.4mと近接しており、時期を異にしようが、出土遺物もなく、新旧関係は明らかでない。

炭混り土坑SX3752は、SD3750の上に掘られた浅い土

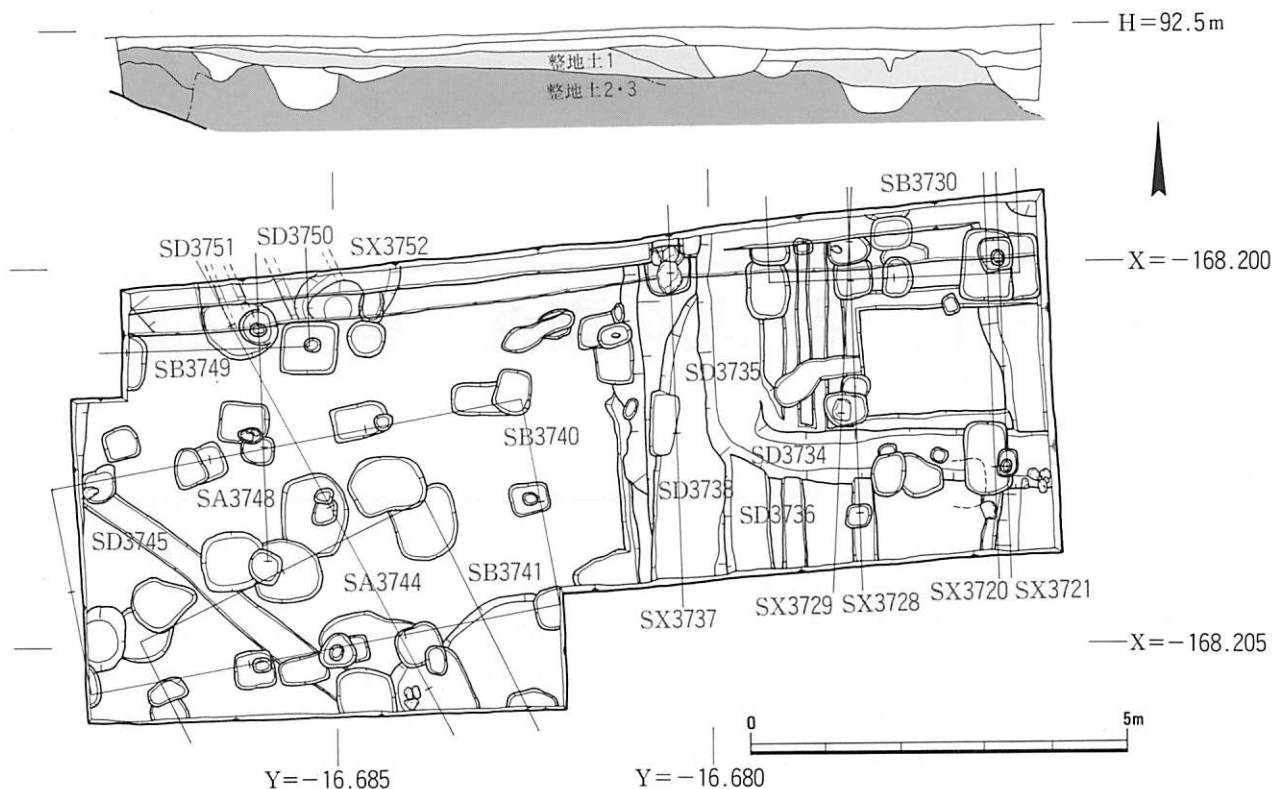


図16 第81-7次調査遺構図・土層断面図 1:100

坑。東西の長さは約1.5m、深さは約0.2m。焼壁を含み、炉の可能性もある。埋土からは飛鳥Ⅰの土器が出土。

上層遺構 掘立柱建物SB3730・3740・3741・3749、掘立柱塀SA3748・3744、斜行溝SD3745のほか、建物か塀か確定できない柱穴列SX3720・3721・3728・3729・3739などがある。便宜上、調査区の西半と東半とに分けて記述する。

調査区西半の掘立柱建物SB3740は桁行4間以上、梁間2間の東西棟。柱間は桁行が約2.1m等間、梁間が約1.4m等間。方位は北で西に10度前後振れる。柱穴から飛鳥Ⅳ～Ⅴの土器が出土。7世紀末～8世紀初頭頃の建物だろう。SB3741はSB3740と重なる位置にある南北棟。桁行1間以上、梁間2間。柱間は桁行約2.0m、梁間2.1m前後。方位は北で西に20度～30度振れる。SB3749は東西に並ぶ2個の柱穴で、柱間は推定2.4m。西はギヲ山があり、3間以上にはならない。建物の可能性が高い。方位は次のSA3748に近い。掘立柱塀SA3748は2間以上の南北塀。柱間は約1.5m等間。方位はほぼ真南北である。SA3744は2間以上の掘立柱塀。柱間は2.0～2.1m等間。方位は北で西に30度前後振れる。この西のSD3745は素掘りの斜行溝。幅約0.4m、深さ約0.3m。埋土に8世紀の土器を含む。西はギヲ山があり真直ぐには延びない。

東半の掘立柱建物SB3730は東西に並ぶ3個の柱穴。中央の柱穴が小さく南北棟の南妻の可能性が高い。柱間は約1.7m等間。方位は次のSX3720などに近い。SX3720・3721は、ほぼ同じ位置で南北に並ぶ2個の柱穴。SX3720

が古く柱穴も大きい。建て替えか。柱間はともに約2.7m。方位はほぼ真南北。SX3728・3729もほぼ同じ位置で南北に並ぶ柱穴。SX3728が古い。柱間は約2.3m等間。SX3729は石を据えている。柱間は約1.5m。方位が北で東に若干振れる。SX3737も南北に並ぶ柱穴。北の柱穴には石を据えている。南の柱穴は水路で壊されている。柱間は約2.1m。礎石建ちかもしれない。

西半の遺構は、新旧関係からSA3744→SB3740・3741→SD3745→SA3748と変遷する。出土土器からみるとSB3740が7世紀末頃から8世紀初頭頃、SD3745が8世紀。SA3744と同様に方位が大きく振れるSB3741は7世紀前半～後半、SA3748と同様に方位が真南北になるSB3749は奈良時代か、平安時代に入ろう。

東半の遺構は、新旧関係から、SB3730→SX3720→SX3721、SX3728→SX3729と変遷する。大半は方位が真南北であり、藤原宮期以降、一部は平安時代に入るだろう。

まとめ

今回の調査では、7世紀前半から平安時代に入る可能性がある8時期以上の遺構の存在が、ギヲ山東麓ではじめて明らかとなった。遺跡の様相は南方の小墾田宮と推定される雷丘東方遺跡や雷丘北方遺跡と類似する。これらとの関係、あるいは藤原京の様相を究明する上で、今後なお周辺の調査の進展がまつられる。なお、今回の調査地でも、表土からではあるが、大官大寺式軒丸瓦6661B 1点と若干の丸・平瓦が出土している。大官大寺との関連の究明も今後の課題である。 (毛利光俊彦)

2 雷丘北方遺跡第7次調査 (第81-8次)

はじめに

本調査は県道榎原神宮停車場東口飛鳥線の新設に伴い実施した。調査地は雷丘の北、ギヲ山との間の微高地に位置する。県道新設とそれに関連する既往の調査では、7世紀後半に造営された大規模な建物群などがみつまっている(『藤原概報22・23』)。今回の調査地の西側で行った第75-16次調査では、7世紀前半の南北溝や整地層および7～8世紀の建物などがみつかった(『藤原概報26』)。また、本調査区の東で実施した第71-10次調査では、7世紀から平安時代初めまでの遺構がみつまっている(『藤原概報24』)。調査は、第75-16次調査区と第71-10次調査VII区との間の遺構の状況を明らかにすることを主な目的とし、これらの調査区および第29-18次調査区と一部重複して調査区を設定した。調査面積は667㎡である。

基本層序 調査区の西部では耕土直下に花崗岩の岩盤風化土がある。東部では盛土、耕土、床土、黄褐色粘土(地山)の順に堆積する。包含層は削平されてほとんど残らない。調査区東部にある地山の黄褐色粘土層は西で岩盤風化土の上ののっているため、本来この層は西部にも広がっていたが、後世の削平で失われたのだろう。岩盤風化土の範囲は雷丘とギヲ山を結ぶ線上に位置する。遺構検出は地山面で行い、一部整地土層上面で行った。

遺構

7世紀前半の遺構 北で西に振れる南北方向の遺構群である。振れの角度は10度から25度の間におさまる。掘立柱建物1と掘立柱塀8、溝3、土坑多数がある。

掘立柱建物SB3666は調査区南部で検出。南北3間(1.8m)、東西2間以上(2.1m)。南北塀SA3661より新しい。掘立柱塀SA3675は調査区東北部の南北塀。3間分を検出。柱間は北1間目が2.1m、それ以外は1.8m。掘立柱塀SA3660はSA3675の西にあり、これより新しい南北塀。7間分を検出し南北とも調査区外に延びる。柱掘形は他の塀に比べて深い。柱間は1.8mで北から5間目だけが2.1m。掘立柱塀SA3661はSA3660の西にある南北塀で、調査区南端で柱穴が失われているものの、11間分を検出。柱間は1.8m・2.1m・2.7mとばらつく。SA3661の北から2間目には東西塀SA3662がとりつく。掘立柱塀SA3668はSA3661と重複し、これより新しい3間の南北塀。柱間

は2.1m。掘立柱塀SA3667はSA3661の西にある3間の南北塀。柱間は北1間が1.8m、他は1.5m。SB3666より新しい。掘立柱塀SA3669はSB3666の西の南北塀。柱間は1.2～1.8m。西側に東西塀SA3670がとりつく。掘立柱塀SA3673は2間の南北塀。柱間は約2m。SX3676はSA3667の西側にあり、一辺約1mの隅丸方形の柱穴2個とその中間に小型の柱穴1個が南北に並ぶ。柱間2.1m等間。性格不明。

南北溝SD3671は上記の建物や塀の西にある素掘溝。新旧2時期ある。下層のSD3671Aは後述の南北溝SD3674を埋め立て、周囲を整地した後に開削される。溝底は北で約0.4m下がる。上層のSD3671Bは溝幅1mから2.5m。北端で西側だけに河原石を積み上げた護岸施設がある。SD3671Bは南端で直角に折れて東西溝SD3672につながる。上層・下層とも飛鳥Iの新しい段階の土師器と須恵器が出土した。南北溝SD3674はSD3671の西にあり、緩く湾曲する。幅0.8～1.5m、深さ0.5m。SD3674を覆う整地土層は、東側で検出した掘立柱塀すべてのベースとなっているのでSD3674は調査区内の遺構の中で最も時期が古い³、出土土器の様相は整地土層やSD3671と大きな違いはない。

その他の遺構 土坑SK3663は、調査区の東辺北部にあり、東は調査区外に広がる。南北8m以上、深さは約30cm。飛鳥I以降奈良時代末までの土器や瓦を出土。土坑SK3664は、調査区北東隅にあるほぼ方形の土坑。東西約5.5m、北辺は調査区外。深さ20～30cm。飛鳥I以降奈良時代初めまでの土器や瓦を出土。土坑SK3665は、SK3663の西、掘立柱塀SA3660・3661と重複する位置にある直径約3mの不整円形土坑。埋土に拳大から人頭大までの河原石が大量に捨て込まれていた。検出面から1.4mまで掘り下げたが、これらの石が井戸枠に組まれていた形跡はなかった。埋土から12世紀後半の瓦器椀、黒色土器椀、羽釜、渥美窯陶器のほか石製硯や瓦が出土した。

出土遺物

土器 飛鳥時代(飛鳥I)から鎌倉時代までの土器が出土。なかでも南北溝SD3671とSD3674およびSD3674を覆う整地土層出土の土器はまとまりのある資料である。

SD3671からは、土師器杯C・G、鉢、高杯G、甕A・B・C、竈や、須恵器杯G・H、鉢A、高杯H、甗、横瓶などが出土。SD3674からは、土師器高杯G、ミニチュ

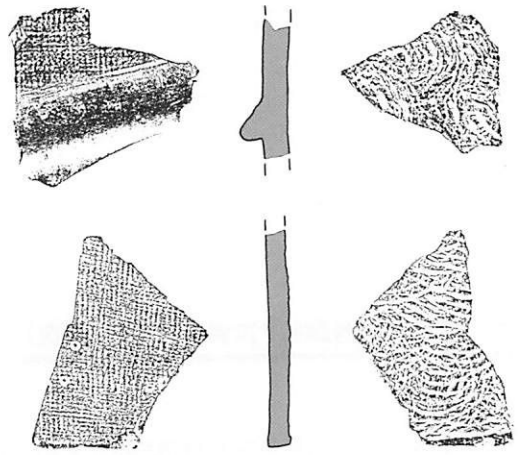


図17 陶棺片 1:4

ア甕C、須恵器杯H、高杯、短頸壺が出土した。SD3674を覆う整地土層からも、土師器杯H、高杯G・H、甕B・C（近江産）と須恵器杯H、高杯、壺、横瓶、甕が出土。これら三者は、いずれも飛鳥Iの新しい段階の良好な資料群で、1994年度の第75-16次調査(雷丘北方遺跡第5次調査)の南北溝SD3580および東半部整地土層出土土器(『藤原概報26』52~55頁、Fig.31・32)と同時期である。

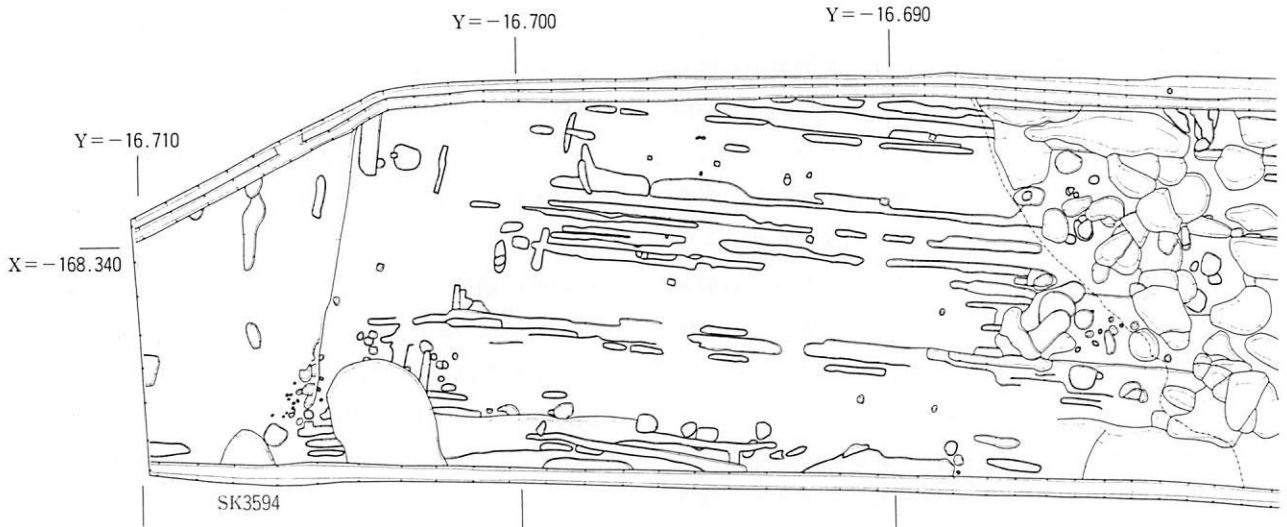
この他、包含層や土坑SK3663などから須恵質の陶棺片が7点出土。外面を格子目叩きしナデ調整したのち突帯を貼り付ける。外面にヘラ描きと竹管紋による施紋を行った破片もある(図17)。

瓦埴類 丸・平瓦の他、軒瓦、塼と隅木蓋瓦が出土。軒瓦は大官大寺所用軒平瓦6661Bが3点出土。隅木蓋瓦は、前面に重弧紋風の紋様をもち、藤原宮所用品である。類

品が藤原宮内裏東官衙地区(第55次調査)で出土(『藤原概報18』10頁第4図)。丸瓦と平瓦は少量。大半が大官大寺のものだが、凸面布目平瓦が少量ある。丸瓦19点2.6kg、平瓦176点29.3kgが出土した。

まとめ

今回の調査区で検出した遺構は、奈良時代の土坑SK3663・3664および鎌倉時代の土坑SK3665以外は、7世紀代とみてよいだろう。これらの遺構は重複関係から、SD3674→SD3671、SA3675→SA3660、SA3661→SA



X=-168.350

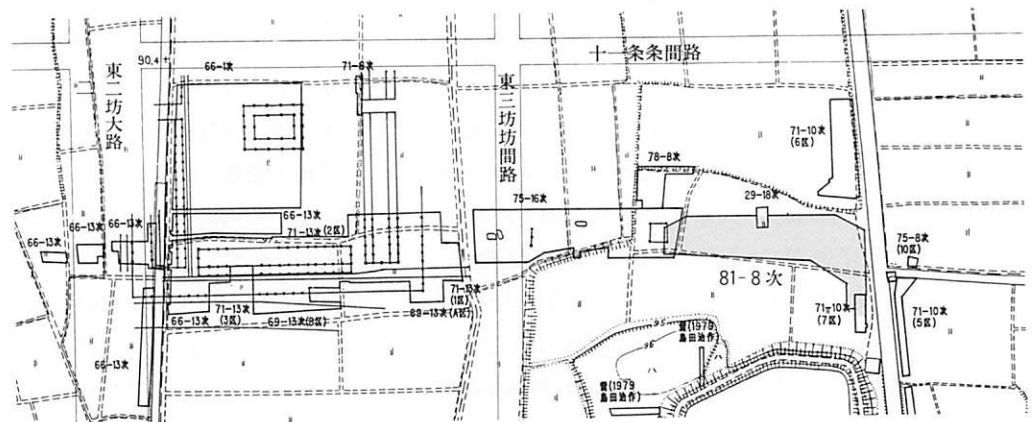


図18 第81-8次調査位置図 1:2000

3668、SA3661→SB3666→SA3667、の変遷がある。だが、出土土器ではSD3674・3671に大きな時期差はなく、共に飛鳥Iの新しい段階でとらえられる。したがって、SD3671にほぼ平行する堀SA3660やSA3661などもこれと同時期だろう。

遺構分布からみると、SD3671以西は遺構が希薄だから、この溝をその東方に展開する遺構群の西限施設とみることもできる。しかし、SD3671は南端で西に折れSD3672に接続し、むしろ西側を囲い込む形で掘削されている。さらに、SD3671以西では検出した柱穴の深さが2～3cmたらずで、後世の大きな削平のため遺構が残らなかったと考えるべきだ。丘陵基盤の花崗岩風化土が遺構検出面に露呈していることもこれに対応する。よって、SA3660やSA3661はSD3671の東にある遺構群の西を限

る施設と考えたい。

これまでの周辺での調査成果と比較すると、隣接する第71-10次調査V・VII区だけでなく、南東の山田道第1・2次調査(『藤原概報19・20』)でも、7世紀前半の遺構は北で西に振れる方位をもつ。雷丘東方遺跡では7世紀後半にはほぼ真南北の方位になっており、周辺でも同様だ。一方、雷丘からギヲ山に連なる丘陵を隔てた西側では7世紀前半の遺構はほぼ方位にのっている(第75-16次調査『藤原概報26』)。このような地点による建物方位の違いは飛鳥地域におけるUrbanization、つまりは宮の所在地と深い関わりがあるように思える。今回の調査では、検出した掘立柱遺構の多くを堀と報告したが、その当否を含め今後の周辺での調査に期待したい。(荒木浩司)

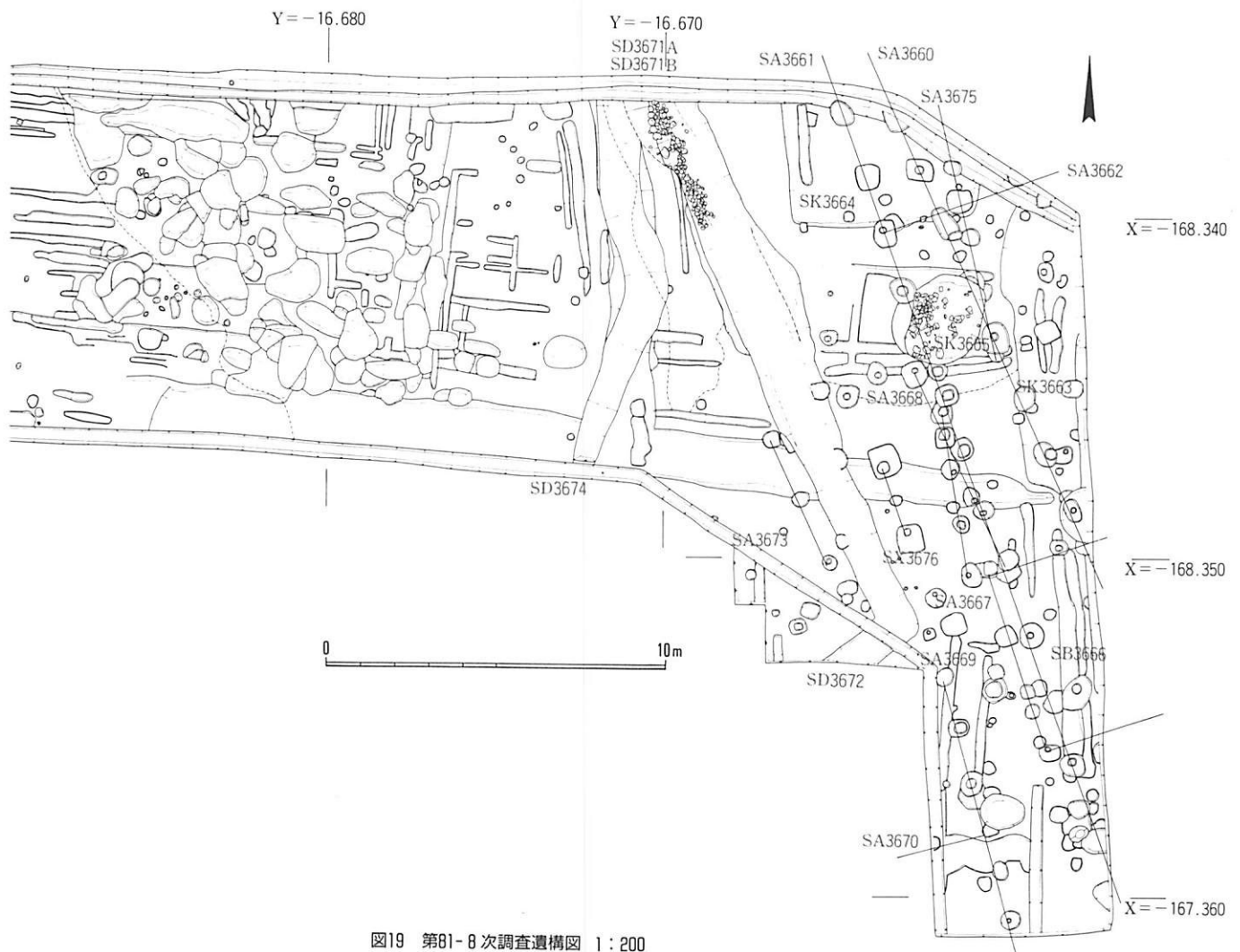


図19 第81-8次調査遺構図 1:200